

## 2. 板東収容所の元捕虜たちの日本研究

— ドイツ東洋文化研究協会『会報』第17巻より —

依岡隆児

### 1. はじめに

ドイツ東洋文化研究協会（OAG）『会報』第17巻（*Mitteilungen der Deutschen Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens*. Bd.17. Tokyo 1922）は、第一次世界大戦で中断していた活動が再開されるのを記念して、「1914年から20年までの日本におけるドイツ人捕虜たちの文学的・学術的作品集」と題されていた。執筆者は当収容所出身の元捕虜たちだった。それゆえ、この雑誌は板東収容所研究において重要な意味を持つものである。これは板東収容所で育まれた日本・中国への関心や研究をドイツ東洋文化研究協会（OAG）の文化・学術活動、ひいてはドイツ人による日本研究の発展・展開を橋渡しするものだった。そればかりか、板東での文化活動がその後の日本学の方針や性格を規定する役割も果たしたことを、このOAG『会報』は明らかにするだろう。ところが、板東俘虜収容所研究において、従来OAG『会報』で板東特集があったことは、ほとんど触れられてこなかった。

そこで本稿では、このOAG『会報』第17巻の存在を知らしめ、その内容を調べることで、ドイツ人たちの板東体験がいかにもその後の日本におけるドイツ人による日本研究や日独文化交流につながっていったかを明らかにすることを目的とする。収容所で通訳を務める「日語通」だった人を中心にした執筆者による翻訳の出典や、収容所での活動についての報告内容などを取り上げ、この雑誌と板東収容所との関連、ならびに執筆者たちによるその後の日本に関する学術的・文化的活動について考察してみたい。

### 2. 『会報』第17巻の内容

OAGとは日本および中国の東アジアについての在留ドイツ人による学術活動や民間での研究交流を行うドイツ東洋文化研究協会で、その機関誌が『会報』である。第一次世界大戦時の捕虜たちは民間人が多く、学者や教師もおり、収容所解放後も日本に残り、OAGに加わった者がいた。そのOAGの『会報』第17巻の「序」には、こう書かれている。

1914年以来、ドイツ東洋文化研究協会は『会報 *Mitteilungen*』を出版することができなかった。戦時中、協会の資産は監視下に置かれ、会員の会合も禁止されていたからである。したがって、戦時中であっても、日本における東アジア地域に関するドイツの学術活動が絶えることがなかったことを、本書とそれ以降の数冊を通して示すことができるのは、当協会にとって特別な喜びである。

本アンソロジーと、近い将来、『会報』に掲載されるであろういくつかのより大部な著作は、日本の捕虜収容所に 62 ヶ月間身を寄せ合っていたドイツ人の中国と日本に関する専門家たちが、真に価値ある多くの著作を生み出したことを示している。学術的な補助なしに捕虜収容所で作成された翻訳や論文の場合、あちこちにちょっとした欠点があることは完全には免れられないことは言うまでもないが、特にこのつつましい最初の巻が、軽い作品から大作まで並べた多様な構成ゆえに、たくさんの友人を見いだすことを、本理事会は願っている。

ドイツ東洋文化研究協会会長

東京 1922 年 8 月

これによると、OAG は第一次世界大戦中、集会 *Versammlung* を禁止されていた。OAG 『会報』も、第一次世界大戦の間、休刊していて、OAG の活動も中止していたのである。ここで「62 ヶ月」とは、戦時下においてドイツ人たちが俘虜収容所で過ごした期間をいう。その一方で、この期間も、日本と東アジア関係の活動は絶えることなく続けられていた。本誌では、そうした元捕虜の中国通と日本通による、東アジアの地域についての成果が報告されている。

「序」には「ドイツ東洋文化研究協会会長」、「1922 年 8 月」と記されていて、会長による挨拶文が掲げられているが、この時の会長の名前は書かれていない。しかし、自らも板東収容所捕虜だったクルト・マイスナー『日本のドイツ人』の彼自身の略歴によると、1922 年当時、本協会会長はマイスナー自身だったことになる<sup>1</sup>。

『会報』の内容（タイトル）と著者・訳者は、以下の通りである。

「故郷 *Unsere Heimat*」 H.グロスマン訳

「有栖川宮威仁親王 *Prinz Arisugawa Miya Takehito*」 H.グロスマン訳

「宮さまへ命を捧げた虎と亀と唐獅子について *Vom dem Tiger, der Schildkröte und dem Löwen, die einem Prinzen ihr Leben opferten*」 ファン・デア・ラーン訳

「皇帝の娘は殴られた *Kaisers Tochter wurde geschlagen*」 K.A.ブレーデブッシュ訳と歴史的注釈付き

「薬草について *Über Heilkräuter*」 J.バート訳

「中国での反乱の動きについて *Zur Aufstandsbewegung in China*」 E.フィッセリング著

「学者たちについて *Über Gelehrte*」 J.バート訳

---

<sup>1</sup> マイスナーの OAG 会長期間は、マイスナーの『日本のドイツ人』(Kurt Meißner, *Deutsche in Japan. 1639-1939. Dreihundert Jahre Arbeit für Wirtsland und Vaterland. Stuttgart, Berlin 1940*) では、「1921-22」ならびに「1932-」である。一方、OAG ホームページでは、これが「1932-1945」となっている。

- 「1919年の御歌会 Die Poesiegesellschaft des Jahres 1919」 K.マイスナー著  
「サハリンのアイヌ語 Die Sprache der Ainus von Sachalin」 H.ティッテル著  
「荒川の土手散策 Deichwanderung am Ara-Strome」 K.マイスナー訳  
「田舎娘 Ein Mädchen vom Lande」 K.マイスナー訳  
「ふたつの現代詩 Zwei moderne Gedichte」 K.マイスナー訳  
「日本の家紋 Japanische Hauszeichen」 H.ティッテル著  
「産屋窓 Gebärdhaustüren」 H.ティッテル訳  
「お伽噺の話 Über Märchen」 H.ファン・デア・ラーン訳  
「すひだしぐすり（竹斎物語より） Das Zugpflaster」 H.ファン・デア・ラーン訳  
「狒々と獵師と鐘 Der Pavian, der Jäger und die Tempelglocke」 H.ファン・デア・ラーン訳  
「12月のイチゴ Die Dezember-Erdbeeren」 H.グロスマン訳  
「月の泉 Die Mondquelle」 K.マイスナー訳  
「日本とヨーロッパの子守唄 Japanische und europäische Wiegenlieder 笠原医学博士の雑話」  
ファン・デア・ラーン訳  
「中国の童話に関する天文学的注釈 Astronomische Anmerkungen zu chinesischen Märchen」  
Dr.F.ゾルガー教授著  
「松山鏡 Der Spiegel von Matsuyama」 H.グロスマン訳  
「終わることのない友への忠誠 Freundestreue, die nimmer aufhört」 W.ボルヒャーディング  
訳  
「三字経 Drei-Zeichen-Klassiker」 J.パート訳  
「千字文 Der Aufsatz in tausend Zeichen」 J.パート訳  
付録：「板東収容所での東アジアに関する活動についての簡単な報告 Anhang: Kurzer Bericht  
über die Tätigkeit im Lager Bando, soweit sie auf Ostasien Bezug hat」 Dr.H.ボーナー

執筆者は収容所で「日語通」として日本語通訳に従事していた者や中国の専門家、中国語に通じた者たちである。翻訳が多いが、その原典にあたると、翻訳作品の選択においてドイツ人たちの日本及び中国の見方や志向性を読み取ることができることだろう。これらの内容を詳細に調べてみよう。

「故郷」はH.グロスマン訳で、原典は『高等小学読本』である。「第1巻第4課」とある。ふるさとへの思いは風土から人間、帝国にまで広がっていくが、最後に「いたるところ青山あり」という言で結んでいるこの文章には、ドイツ人捕虜たちが自らの故郷ふるさとへの思いを重ねていたことが推測できる。

「有栖川宮威仁親王」は、同じく『高等小学読本』の中にある「艦上の威仁親王閣下」のH.グロスマン訳である。題名は変えている。「第1課」とある。

「宮さまへ命を捧げた虎と亀と唐獅子」は、大阪朝日新聞 1918年8月19日の記事からのファン・デア・ラーンの翻訳である。原典には挿絵が付いている。紀州瀨の伝説とされ

ている。熊野川の動物の形をした石の由来についての物語である。

「皇帝の娘は殴られた」は、K.A.ブレーデブッシュの訳と歴史的注釈で、小学校の中国史教科書が出典である。「北京歌遊び大全」から取られた「歌遊びの歴史的導入」であるとされている。

「薬草について」と「学者たちについて」、ならびに「三字経」、「千字文」はJ.パートが中国語から訳している。パートは、後にOAGの副会長になり、会長のマイスナーを補佐した。多くの日本に関する著作を残し、第二次世界大戦後も日本に残り、板東での交流に尽力した人であるが、収容所時代には、このように中国語翻訳をしていたことがわかる。

マイスナーによる「1919年の御歌会」は、皇室の年中行事である歌会についての記述であり、天皇の歌から各地方の代表の歌を紹介・解説している。この皇室の行事については、後述する『国民年中行事』に詳しく書かれていたとされる（Mitteilungen,63）。

「サハリンのアイヌ語」は、H.ティッテルの著である。アイヌ語の研究は明治時代からドイツ人によって行われていたが、ここではアイヌ語の文法説明が展開されている。ちなみに、ティッテルは収容所時代に「相撲図説」も書いていた。本誌に掲載されている「産屋窓」の記事が出ていた『民俗と歴史』の別号・第1巻第5号（1919年5月1日）が「相撲号」で相撲特集となっていたので、収容所でこの雑誌が定期的に取り寄せられていたとすれば、ティッテルがこれを参考にした可能性もある。

「荒川の土手散策 Deichwanderung am Ara-Strome」はマイスナーの訳で、「桜草」（大町桂月『筆のしづく』<sup>2</sup>）が原本である。桜見物で、遊客として川辺を散策する情景が描かれている。

「ふたつの現代詩」も、マイスナーにいくつか翻訳がある大町桂月からのものである。「峠の茶屋」「森かげの烟」というふたつの詩とも『筆のしづく』に収録されている<sup>3</sup>。これらの詩には注として、ローマ字による原文が付されている。「峠の茶屋」の俗謡は、中内蝶二との共著『少女と山水』の「峠の茶屋」の最後に載せているものである<sup>4</sup>。この本は、いわゆる山水記で、新体詩として書かれている。序には、桂月は共著者の中内と同郷（高知）で同窓、同じ博文館の編集局にいたという縁があったと述べている。ちなみに、中内蝶二の「田舎娘」<sup>5</sup>は本誌にマイスナーの訳があるが、後述するマイスナーの『舞扇』にも同じ翻訳が載せられている。

「産屋窓 Gebärhaustüren」は、『民族と歴史』第1巻第2号（1919年2月1日）の記事のH.ティッテルによる翻訳である。「民族短信民俗断片」の7篇の中の一編で、徳島の田所市太が書いた産屋についての報告である。そこには「阿州撫養の産屋窓。（徳島田所市太君談）」として、「撫養の付近堂の浦には、種々の古い遺風があるが、産屋窓も其の一つだ。此の村の住宅には普通の出入口とは別に、平時は使はぬ出入口があつて、それを産屋窓と云ひ、

<sup>2</sup> 大町桂月『筆のしづく』公文書院、1915年

<sup>3</sup> 同書、14～15頁

<sup>4</sup> 大町桂月、中内蝶二『少女と山水』日高有隣堂、1905年、160頁

<sup>5</sup> 同書、28～30頁

産婦は産後何日かの間、必ずここから出入をする」と書かれている。

「お伽噺の話」は厨川白村の作（『厨川白村集第三巻 文藝評論』厨川白村集刊行会、1925年）である。「鉢かつぎ」と「シンデレラ」を比較する比較民間伝承研究の成果である。ファン・デア・ラーン訳で、出典は大阪毎日新聞（1918年7月8日～9日）で連載されていたものである。厨川（くりやかわ）白村（1880－1923）は Igawa Hakuson と表記され、「京都大学文学博士」と紹介されている。高木敏夫『比較神話学』や日本伝説学会のことにも言及されている。

記者のラーン van der Laan については、田村一郎『板東俘虜収容所の全貌』<sup>6</sup>によると、神戸の貿易商ラムゼーガーが甥のファン・デア・ラーンがいた板東を支援していたという。ラムゼーガーはまた、『忠臣蔵』を作曲した。ラーンの息子ディルク・ファン・デア・ラーンは俘虜研究をしている<sup>7</sup>。

「すひだしぐすり」は H.ファン・デア・ラーン訳である。仮名草紙の『竹斎』の中のエピソードであるが、大阪朝日新聞（1918年7月29日）に掲載されたものの翻訳である。花田富二夫ほか編『假名草子集成』第48巻に「藪医者竹斎の物語」があるが、それによると、鍛冶屋はくずが目に入って目を患っていた。「何哉覧くすりをそくいみに押まぜて、眼にはる、三日過てとり給へ、眼に子細はあらし、とこまやかに語る、三日過て取りければ、眼さらりとあきにけり、さてもさてもめいよなる事とて、薬種を問は、じしやくにて有として、其じしやくの鉄をすふ子細を詳にかたる也」<sup>8</sup>という。「藪医者」竹斎がたまたま通りかかったところで、磁石の出る場所を発見して、その磁石を練って膏薬にして、眼に葛が入った鍛冶屋にそれを貼って、治したという話である。

「藪ぐすし竹斎」本として草紙にあり、「京より東へ下る紀行」「道すがらの名所、あるいは堂寺社などにて発句しまたは狂歌をよみて、誠にはなしの種となるべき草紙也」<sup>9</sup>とある。出典の新聞ではダイジェスト風に、漫画を付けた「おとぎばなし」として掲載されていた。

「狒々と獵師と鐘」は、H.ファン・デア・ラーン訳による徳島板東の伝承で、出典は大阪朝日新聞1919年1月20日に掲載された漫画付きの物語である。「阿波国板野郡東村大麻山の伝説」とある。獵師が寺の和尚の助言で悪さをする狒々を退治するという話で、まさに板東収容所のあった地域に伝わる伝説だった。

「12月のいちご Die Dezember-Erdbeeren」は出典が記載されておらず、「月の泉 Die Mondquelle」は「大阪朝日新聞1917年7月13日」と出典が書かれているが、たどり着くことができず、原典は不明である。

「日本と西洋の子守唄」は、笠原医学博士の雑話のファン・デア・ラーンによる翻訳で

<sup>6</sup> 田村一郎『板東俘虜収容所の全貌』朔北社、2010年、64頁

<sup>7</sup> 瀬戸武彦『青島から来た兵士たち 第一次大戦とドイツ兵俘虜の実像』同学社、2006年、128頁

<sup>8</sup> 花田富二夫ほか編『假名草子集成』第48巻、東京堂出版、2012年、183頁

<sup>9</sup> 同書、176頁

ある。出典は記されていないが、「すひだしぐすり」と同じく大阪朝日新聞 1918 年 7 月 29 日に掲載されたものの翻訳である。副題には「東西の共通点は動物が多く現れること」とある。捕虜たちに西洋・ヨーロッパとの比較伝承への関心が強かったことがわかる。

「中国の童話に関する天文学的注釈」は、中国研究者の F.ゾルガー教授の著である。板東収容所での講習会「中国の夕べ」で中心だったゾルガーが、中国だけでなく幅広く、世界各地の天文関連の伝承を調べて、比較している。織姫星 *Spinnen* が七夕に天の川を渡って牛飼 *Kuhhirten* のところへ行くという中国の話のところ、日本の七夕伝承との違いについて述べる際に、マイスナーが「七夕」について書いていることにも言及している (*Mitteilungen*,182)。マイスナーは後に『七夕』という本を刊行する。ゾルガーとマイスナーは収容所時代から互いに日本の文化について情報交換をしていたことが推測される。

「松山鏡」は巖谷小波の昔話のグロスマン訳である。著者は *Iwaya Sasanami* と表記されている。この「松山」は四国の松山ではなく、越後の地名である。巖谷小波『日本昔噺』<sup>10</sup> に収録されている「松山鏡」によると、母を亡くした娘が、継母のいる家で実母の形見の鏡を離さず、そこに映る自分の姿を実母と思いこみ、亡き母を偲ぶという話である。

こうした内容だが、この OAG『会報』を全体としてみると、日本の民俗、昔話、山水もの、風物ものが多く紹介されている。国を越えて郷愁の念が共有されていたのかもしれない（「故郷」）。それは、裏返せば、自由への希求だっただろう。マイスナーの放浪詩人・大町桂月への傾倒がうかがえるが、そこにも鉄条網の中の境遇からの自由人へのあこがれがあったはずだ。地域や土地への愛着・関心も強い。こうした翻訳には異郷にあって故郷・ドイツをしのぶという効用があったのかもしれない。

出典をみると、大阪朝日新聞、大阪毎日新聞からの記事がある。それらの新聞を定期購読していたのだろう。そのほか民俗学の雑誌『歴史と民俗』、『高等小学読本』（「故郷」「有栖川親王」）、桂月の単行本などからの訳がある。また、「松山鏡」（越後の話）などの昔話や巖谷小波の物語、徳島関連では、「産屋窓」と「狒々と獵師と鐘」がある。後者はいずれも、まさに収容所のあった鳴門・板東ゆかりの話であり、捕虜たちがこの地に愛着を抱いていたことがうかがえる。

### 3、「板東俘虜収容所での活動について」

次に、OAG『会報』第 17 巻の付録である「板東俘虜収容所での活動についての簡単な報告」を見ていく。これは、収容所での彼ら捕虜たち自身による報告であるので、ここからは板東収容所における具体的な文化活動を知ることができる。

これによると、ゾルガーの報告「I. 中国の夜」では、収容所からの提案に従って、1917 年 5 月 14 日に板東に移ってすぐ、彼は「中国の夕べ」として知られる、中国の土地と人々の性質に関する連続講義を始めた。週 2 回、1 回 1 時間の講義で、1917 年 12 月末までに、35 回開催された (*Mitteilungen*,262) とある。

<sup>10</sup> 巖谷小波『日本昔噺』平凡社、2001 年

「中国の夕べ」は、収容所側からの提案によって始められたという。ゾルガーとともに、ティーフェンゼー、フィッセリング、マーンフェルトらが講師となった。聴衆の数は当初、300人だったが、テーマが専門分化していくにつれて減り、最後は80人ほどになった(Mitteilungen,265)。

日本語授業に関しては、クルト・マイスナーが報告している。「日本語を教える条件は、中国語を教える条件とは異なっていた」(Mitteilungen,266)として、捕虜仲間の多くは戦前から日本に長く住んでおり、現地の言葉を多少なりとも話すことができた。一方、書き言葉を操れる人はいなかった。能力に応じてグループを作らなければならなかった。それゆえ、クラス数を多くして、1クラスの生徒数は少なくした、という。マイスナーによると、「受講者は通常、個々に日本の小学校の教科書を使って、自分で書くことの基礎を学んだ。上級の生徒には新聞を読む練習をさせ、口述筆記をさせた。これと戦時電報の毎日の翻訳で、私たちは書き言葉の文法を勉強せざるを得なかった。そこで私は芳賀矢一教授の文法書『現代文典』を翻訳し、日本の小学校の読本や新聞などから練習問題を選んで小さな教科書を自分で作成した。

その後(1918年)、私は少人数の友人たちと日本の地理を研究し、師範学校や中等学校向けの日本語の教科書2冊を手引書として、ドイツ語に翻訳した。この翻訳と私の日本語口語講座の内容は、板東収容所の印刷所で印刷された。しかし、両作品は収容所内での教育のみを目的としており、一般向けではなかったため、印刷部数は収容所内の関係者の数に限られていた。

初期のころは日本語を学ぶことに興味を持つ捕虜は少数であったが、その後関心が高まり、何人かの同志、特にH.シュタインフェルトは同じ精神でレッスンを行っていた」(Mitteilungen,267)とある。

中国語講習会は他コースに先んじて始めたこともあり、当初は200名の参加者を集めていた。一方、日本語の方は少人数で始まり、徐々に参加人数を増やしていった、という。教科書については、『日本語日常語教科書』(板東収容所印刷所 1918年)が収容所で発刊されていたが、これは、『日本語日常語教科書』第一部、松山(1916)と『日本語日常語教科書』第二部、松山(1916)の再版である<sup>11</sup>。シュタインフェルトは、この報告者であるマイスナーの親友で収容所では常に同室だった。もともと商人として戦争前から日本に来ていて、解放後もマイスナーと仕事上協働していた。しかし、彼がユダヤ系だったため、ドイツがナチ政権になってからは、ふたりはたもとを分かつことになる<sup>12</sup>。とはいえ、この時

---

<sup>11</sup> 中里信一「板東人、クルト・マイスナー覚書」愛知学院大教養部紀要54(4)、2007年。

<sup>12</sup> Christian W.Spang, Die Deutsche Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens (OAG) zwischen den Weltkriegen. In: Thomas Pekar (Hrsg.), Flucht und Rettung Exil im japanischen Herrschaftsbereich (1933-1945). Berlin (Metropol) 2011, S.85f. なお、同書では友人だったシュタインフェルトも、ユダヤ系であったため、入会していたOAG(マイスナーが会長)で「切られた」というその妻の言を紹介している(S.82)。一方で、マイスナー回想録の「ユダヤ人の友だち」の章では、シュタインフェルトについては「親友」としているの、ユダヤ人問題に関して彼が複雑な思いを抱

点ではマイスナーが特にシュタインフェルトに言及し、「同じ精神で」日本語教授を行ったとしていることを強調していることから、マイスナーのシュタインフェルトへの強い信頼感がうかがえる。

「IV.私たちの回覧冊子 (Arbeitsmappe マップ) について」は、ヘルマン・ボーナーが報告している。「1918年の夏、日本語や中国語、その他の東洋の言語から翻訳したり、これらの地域の著作をまとめたり、関連する性質のエッセイを書いたりしている個人からは、相互助成の目的に、同じ方向で仕事をしている人たちが自分の仕事にアクセスできるようにすべきだという考えが生まれた。こうして1918年7月1日から、3~4本の記事を収めた週刊マップが参加者の間で回覧されるようになった」(Mitteilungen,270)という。この中で、「Des Kaisers Tochter wurde geschlagen」などが本会報に収録されている。

さらに続けて、「数多くのおとぎ話を取り上げられ、当然のことながら、古くてよく知られた、しかし特に巧みに語られたより広範にわたるおとぎ話も語られていた」(Mitteilungen,271)として、作品を挙げている。大江小波 Oeno Sasanami が語る『猿蟹合戦』、巖谷小波が語る『松山鏡』は、いずれも H.グロスマン訳だった。巖谷小波が語る『舌切り雀』は H.v.d.ラーン訳である。ティムはヴィターレの「中国小笑話集」を翻訳した。マイスナーは主に落語に焦点を当て、過去と現在の日本の国や人々を幅広いシリーズで生き生きと紹介した。渡船で出会う武士と下層民(『岸柳島(巖流島) Gauriujima』)、大名の栄華と小商人の喜怒哀楽(『火焰太鼓』)、茶道の格式と対照的な老人と小市民、結婚もの(『お文さん』<sup>13</sup>、『読み書きのできない女』)、『金明竹 Zu vermieten』の泥棒芝居、『二番煎じ』の古い田舎町の風景、『福祿寿』<sup>14</sup>の典型的な家族像、『太鼓腹』や『くしゃみ講釈』に見られる芸術性や巧みな語り、『狐憑き』の狐信仰などなどだ。シュタインフェルトも落語作品も翻訳しているとある。ここで、大江小波というのは巖谷小波の別号である。本会報では、巖谷小波が語る『松山鏡』の翻訳が収録されている。落語に関しては、マイスナーが OAG で寄席の講演を行っている<sup>15</sup>。

さらに続けて、H.ティッテルは、板東収容所のある阿波の国について、土壌の形成、天然資源、町と国、歴史的事実などを、継続的に紹介していたとする。彼は日本の相撲についての論文を書いている。また、5人(A. Barghoorn、E. Keyssner、H. v. d. Laan、G. Rudolf、E. Simonis)が集まり、日本の生活を月ごとに詳細に記述した著作を翻訳し、回覧しているが、これらの一部は実際、中山三郎『国民年中行事』(科外教育叢書第18、1917年)から

---

いていたことが推測できる。Kurt und Hannie Meißner: Sechzig Jahre in Japan. Lebenserinnerungen von Kurt und Hanni Meißner. Hamburg 1973, S.183.

<sup>13</sup> 原文では O-Fumi-sama となっているが、「結婚もの」とあるので、O-Fumi-san の誤記であろう。

<sup>14</sup> 『ディ・バラック』第4巻第4月号(1919年)に「K.M」による訳が出ている。

<sup>15</sup> OAG では1912年にマイスナーの寄席の講演が行われ、OAG で印刷されている。さらに「寄席」は、後に1963年にOAGの90周年記念号でマイスナーが再び取り上げている。拙論参照、「解放後の板東収容所俘虜たち—日独文化交流の一側面—」『言語文化研究』徳島大学総合科学部第31巻 別刷 2023年12月

『ディ・バラック』第4巻第5月号(1919年)などでも翻訳紹介されている。これは、後に1926年に完全版として *Das Jahr im Erleben des Volkes* として、OAG(『会報』第20巻)から翻訳刊行されている。ここではマイスナーの協力に感謝し、「日本の詩歌についての注釈」を付けている。マイスナーは後に、七夕祭りの単行本を刊行し、万葉集、古今集、新古今集、金槐集の七夕関連の歌を翻訳し、地域の風習や口伝も紹介している。彼はまた、口伝、落語、おとぎ話など、狸信仰に関するあらゆるものを収集していたが、なかでも、『四国の奇談 古狸合戦』は、丸山伊礼次郎が速記した神田伯龍の口承による実説を翻訳・抜粋したものであるという(Mitteilungen,272)。富田畜業については、「ドイツをモデルにした富田畜業」が、グロスマンによって訳されていた(Mitteilungen,273)。回覧されたマイスナーの翻訳については、『七夕』が自分の父の出版社(Otto Meißner Verlag)から1923年に、『古狸合戦』の方は自らのOAG会長就任に際して1932年に、それぞれ刊行されている<sup>16</sup>。このほか、経済・工業・産業についての文献が、回覧されていた。こうした回覧冊子(マップ)が、収容所内で回覧され捕虜たちの間に交流をもたらしていた。また、この成果が月例会につながっていったのである。

最後に、言語への関心があったことが、触れられている。「ティッテルはサハリンのアイヌ語の簡単な説明に加え、満州語と朝鮮語の概要をしっかりと説明し、V.コステノーブルはチャモロ語の文法をまとめた。ティーフェンゼーの辞書『語源順中独辞書』については別のところで触れている」(Mitteilungen,273)とある。さらに、東洋に関する蔵書リストが作成され、新入荷の書籍、他の書籍の翻訳など、またあれやこれやの日本の雑誌が回覧マップには含まれていたという。このうち、ティッテルによるサハリンのアイヌ語についての研究は本会報に収録されている。

このように、書籍、新聞、雑誌も所内で回覧されていたが、さらに新聞については、ヘルマン・ボーナーがこう報告している。「前述したように、電報メッセージは、迅速なニュースサービスの目的で、日本と中国の新聞から翻訳された(松山:Hptm. Stecher, Tiefensee, Meissner, Bärwald)(丸亀:Grossmann, Tittel)(徳島:Werner)。この新聞から、T.T.B.("Täglicher Telegrammdienst Bando"、ヴェルナー、グロスマン訳)という定期的な日刊紙が、比較的大きい機動的な板東の収容所印刷所から発行された。また、週刊新聞による東洋の物事について、一般的に理解しやすく、有益な情報を提供するために行った活動にも言及しなければならない」(Mitteilungen,274)と述べている。この週刊新聞については、徳島の『トクシマ・アンツァイガー』と、松山の『ラーガーフォイアー』、その続編である板東の『ディ・バラック』は発行されていたとして、収容所のあった四国に関する記事の一部を列挙している。「地元の視点を生かし」として、『ラーガーフォイアー』では、「松山の町からあれこ

---

<sup>16</sup> Kurt Meißner, *Das Tanabatafest. Die Mythe, das Fest und die Geschichte über Tanabata in alten japanischen Authologien.*Hamburg (Otto Meißner Verlag) 1923. Kurt Meißner(übersetzt): *Seltene Geschichte aus Shikoku. Der Krieg der alten Dachse. Eine wahrheitsgetreue Überlieferung. Mündlich vorgetragen von Kanda Hakuryu, einem berufsmässigen Erzähler von Helden- und dergl. Geschichten.* Tokyo 1932.

れ」(K.マイスナー、第1巻第5号)、「人形祭り(雛祭り)」、「男の子の祭り(五月の節句)」(K.M.、第1巻第21号)、「季節の移り変わり」、「当地の博物館の展示品について」(Ldv.、第1巻第19号)が、『ディ・バラック』では「板東の周辺」(T.、第1巻第3号)、「イタノ郡の行政と経済」(T.、第1巻第4号)、「阿波の国の4月」(K.M.、第2巻第7号)、「板東の学校訪問」(P.K.、第2巻第6号)、「徳島の大名の墓所」(T.、第2巻第14号)、「四国の塩」(T.、第2巻第22号)があるとしている。さらに、「日本の商船建造」(T.、第1巻第21号)、「日本の高炉・鉄鋼業」(K.M.、第2巻第18号)なども挙げている(Mitteilungen,274)<sup>17</sup>。

このように、この付録では、板東収容所での文化的活動として月例会、マップレ回覧、中国語と日本語の授業、新聞・雑誌の閲覧・翻訳、日刊紙・週刊新聞の刊行などについて、報告されている。板東収容所では活発で多様な文化活動が展開されていたのである。また、ここで紹介されたものには、その後、大成され刊行されたものもあり、それらの活動がその後刊行されるなど、解放後の日本研究につながっていったことがわかる。

#### 4、元捕虜のその後の翻訳などの活動

OAG『会報』第17巻が出た後も、元俘虜たちは引き続き、日本研究や日本文学翻訳活動が続けていった。その一人クルト・マイスナーはこの『会報』でもすでにいくつか日本文学翻訳や日本文化紹介をしていたが、さらにその後、日本文学の翻訳や著作活動を行っている。このマイスナーの活動からも、板東収容所時代からOAGを経て日本研究が発展していく経緯を明らかにできるだろう。

マイスナーは日本文学翻訳作品集『舞扇』(Der Tanzfächer und andere kleine Geschichte aus Nippons heutigen Alltagsleben. Tokyo 1943 (Privatdruck).国立国会図書館にデジタル資料あり)を第二次世界大戦中に書いていた。この本からは、日独文化交流に関して軍国主義の時代の中でその立場や制約のもとで展開された文化活動の可能性と限界を明らかにできると考えられるので、まずはこの翻訳本を取り上げてみる。

この翻訳本は、「序」によると、収められている作品は16作である。刊行の主目的は気軽に今日の日本の日常生活についての知識を広げることである。一作家一作品の原則で選書し、それぞれの作品翻訳には許可を得ている。戦後になったらゆっくり出版したい。歴史ものや戦争もの、植民地もの、冒険もの、探偵ものはこのアンソロジーにはふさわしくない。アブノーマルな心理を描いたものが中心になっているものはず、典型的な日本のものを選んだ。というのも、自分が見るところ、日本人は心理的にはまったく健康だからだという。編集校正の協力者の名を挙げ、妻、秘書のカツ・イノウエ、E.ハインリッヒス博士、A.ベック博士、高等学校二級教諭 H.D.フライシュハウアーに感謝するとある(Tanzfächer,i-ii)。

<sup>17</sup> それぞれの記事には、筆者が翻訳本『ラーガーフォイアー』第1巻(鳴門市、2022年)と『ディ・バラック』第1巻～4巻(鳴門市、1998年～2007年)をもとに、その記事の執筆者とその掲載巻号を括弧内に記した。

この本は、私家版であり、知人の間でのみ配布された。マイスナーの回想録によると、翻訳として東アジア地区の友人に配布され、このうち若干の作品は上海で英訳されている<sup>18</sup>。

ここで翻訳されている作品は、井伏鱒二「山上風景誌」（出典記載なし。『オール読物』8(10) 1938年10月)、長田幹彦「舞扇」（『講談倶楽部』1939年6月特別号)、子吉徳次「女中と日記 *Dienstmädchen und ihr Tagebuch*」（出典記載なし)、南川潤「春の俘虜」（『オール読物』1940年6月特別号、『曲馬館：短編集』学芸社、1940年)、貴司山治「阿波の小島」（『富士』13(10) 1940年)、火野葦平「紙芝居」（『オール読物』1941年11月)、下村千秋「少女の魂」（『オール読物』8(10)1938年10月1日、『月寒の女』中央公論社、1929年)、林芙美子「川 *In Strom*」（出典記載なし)、中内蝶二「田舎娘」（『少女と山水』)、佐々木邦「易断と幽霊」（『キング』14(10) 1938年8月15日、出典不明)、和田傳「地下水」（『野に母あり』錦成出版社、1942年)、永井荷風「色男」（『新橋夜話』靑山書店、1912年)、藤沢桓夫「収穫日記」（『横顔』輝文館、1941年)、伊藤光太郎「最初に貼られた札 *Der anfangs angeklebte Schild*」（出典記載なし)、芹沢光治良「女の海」（『祈りのこころ』金星堂、1939年)、坪田譲二「甚七南画風景」（『文藝春秋』1938年5月）である。ただ、この本には目次に出ていないが、マイスナー自身の詩「ノボリベツ」も入っている。

これらの翻訳作品には出典を明示しているものもあれば、していないものもあるし、出典が書かれていてもたどり着けないものもある。1930年代後半から40年代に書かれた作品が多く、大衆文芸雑誌等に掲載されていたものも目立つ。『オール読物』『富士』『文藝春秋』『講談倶楽部』から幅広くとっている。井伏や火野葦平、林芙美子、永井荷風、坪田譲二など当時の著名な作家もいれば、中内蝶二のように明治・大正時代に活躍した人もいる。作品舞台は田舎・地方が多い。中国・南京（火野「紙芝居」）の話もある。四国関係では貴司「阿波の小島」、高知出身の中内蝶二の作品がある。芸者関連の作品としては長田「舞扇」があり、下町や花柳界、裏町の風俗への関心もうかがえる。

なかでも貴司山治「阿波の小島」は、マイスナーが捕虜体験をした松山と徳島を舞台にした、徳島出身の作家が書いた作品である。貴司が大東亜共同体論を支持し、戦争美化に傾いていた時期に書かれた作品で<sup>19</sup>、たしかにその傾向がうかがえる。地方の衰退に対して、自立する意志をたたえるというテーマになっている。戦時統制の中、雑誌で発表されていて、地域性への関心や、地域の社会文化への共感が見られる。

徳島の小島に帰省した軍人が、タケノコを育てている青年の話を妹から聞くという体裁で、青年のエピソードを語っている。青年は傷痍兵として道後で療養しているうちに、タケノコづくりのを知り、これを故郷の島でも生育して、島の産業にして住民が経済的に自立できるようにしようとする。資産家の男の養子縁組の話も固辞し、自ら清貧に甘んじながら自立しようとする青年の姿を語っている。戦争協力的な意図も見える小説だが、

<sup>18</sup> Kurt und Hannie Meißner, a.a.O., S.268.

<sup>19</sup> 『細田民樹、貴司山治集』（『日本プロレタリア文学』第30巻）、新日本出版社、1987年、486頁

徳島出身作家による徳島と松山を舞台にした作品をあえて選んでいることは特筆に値する。戦争ものは選ばないようにしたとはいえ、この作品をあえて選んだ背景では、マイスナーの四国での収容所生活の体験が働いていたことも推測できる。

一方で、佐々木邦や子吉徳次のユーモア小説など、戦時下にあることを忘れさせるものや庶民の日常を描くものもある。さらに職業婦人の感傷旅行や施設の孤児の話、農民の農作業の記録、女中の日記、見合いの話（林芙美子「川」では、訳者による「導入」が設けられ、日本の結婚のあり方「見合い」について詳しく解説している）、画家の取材旅行でのエピソードなどが収録されており、マイスナーが言うように、作品の選択には、当時の日本社会における様々な階層の人々を取り上げていることがわかる。

ちなみに、この文学作品翻訳アンソロジーの巻末には、マイスナー著作目録があるが、マイスナーの回想録『日本での六十年』の巻末にも自作目録がある。佐藤林平「日本の紹介者クルト・マイスナー」の著作目録でも、その著作を挙げている。マイスナーの自作目録で「日本におけるドイツ人に関する本」として挙げられている、“General” Eduard Schnell (In: Monumenta Nipponica der Sophia Universität Vol.6 Nr.2, Tokyo 1941) は、エデュアルト・シュネル（スネル）に関するもので、彼は幕末に日本に来た商人であったプロイセン人兄弟の弟だった。また佐藤の目録によると、A.R. Weber の *Kontorrock und Konslatzmütze*（「ブロックと山高」）もマイスナーが刊行している<sup>20</sup>。

マイスナーの翻訳には他に、前出の『阿波の狸合戦』や、Kafu Nagai, *Geisha in Rivalry*, Tokyo: Charles E. Tuttle, 1963（永井荷風の「腕くらべ」英訳）がある。これは、*Geisha in Rivalry translated by Kurt Meissner with the collaboration of Ralph Friedrich. Illustrations by Shin Misho* とされていて、タトル版の訳者紹介では、マイスナーが翻訳した日本の文芸作品は数多い。彼はまた、永井荷風の友人でもあった。共訳者のラルフ・フリードリッヒは日本語の児童書を英訳した実績もあり、詩集も出しており、タトル社の編集者の一人だった、とされている。

以上、本章では、解放後の元捕虜・マイスナーの日本文学翻訳活動として、翻訳集『舞扇』とその後の翻訳を見てきたが、それらを見るかぎりでは、収容所解放後、OAGでの活動を経て、その後も、日本文学ならびに日本文化の紹介・翻訳が継続されていたといえる。そこからはまた、マイスナーが時局に乗ることなく、日本滞在や俘虜収容所での体験から愛着を深めた日本の文学・文化を可能なかぎり伝えようとしていたことも読み取れる。

## 5、おわりに

---

<sup>20</sup> 佐藤林平の著作目録はOAG提供の資料に拠りながら、国際交流基金図書館で筆者（佐藤）が見たものはOAGのカatalogに載っていても付け加えたという（佐藤林平「日本の紹介者クルト・マイスナー」『慶応大学経済学部日吉論文集』(34)、1984年）ちなみに、A.R. Weber. *Kontorrock und Konsulatmütze Neuausgabe von 1973 mit einem Schlüssel und geschichtlichen Anmerkungen Deutsche Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens* 1981.は、シュネル関連資料であるA.R. Weberの小説にマイスナーが注釈をつけたものである。

以上、本稿では OAG『会報』板東俘虜収容所特集号を取り上げ、その内容を調査し、さらに元捕虜の日本文学の翻訳や著作を取り上げ、収容所内での文化的活動が解放後は OAG に継承され、さらにそれがドイツ人の日本研究へと展開していったことを明らかにしてきた。しかし、今回は、収容所元捕虜たちの文献を網羅的に扱うことができなかった。今後は彼らの戦後にまで及ぶ著作・記事・論文についても調査し、日独文化交流の実相を明らかにしていきたい。

## 参考文献

- Kafu Nagai, Geisha in Rivary translated by Kurt Meissner with the collaboration of Ralph Friedrich. Illustrations by Shin Misho, Tokyo 1963.
- Kurt Meißner, Das Tanabatafest. Die Mythe, das Fest und die Geschichte über Tanabata in alten japanischen Authologien. Hamburg: Otto Meißner Verlag 1923.
- Kurt Meißner, Lehrbuch der Grammatik der japanischen Schriftsprache. In: Die Deutsche Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens im Buchhandel 1927.
- Kurt Meißner(übersetzt): Seltsame Geschichte aus Shikoku. Der Krieg der alten Dachse. Eine wahrheitsgetreue Überlieferung. Mündlich vorgetragen von Kanda Hakuryu, einem berufsmässigen Erzähler von Helden- und dergl. Geschichten. Tokyo 1932.
- Kurt Meißner, Deutsche in Japan. 1639-1939. Dreihundert Jahre Arbeit für Wirtsland und Vaterland. Stuttgart, Berlin 1940.
- Kurt Meißner, Der Tanzfächer und andere kleine Geschichte. Privatdruck 1943.
- Kurt und Hannie Meißner: Sechzig Jahre in Japan. Lebenserinnerungen von Kurt und Hanni Meißner. Hamburg 1973. (2.Aufl. Hamburg 2007)
- Mitteilungen der Deutschen Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens. Bd.17. Tokyo 1922.
- Christian W. Spang, Die Deutsche Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens (OAG) zwischen den Weltkriegen. In: Thomas Pekar (Hrsg.), Flucht und Rettung Exil im japanischen Herrschaftsbereich (1933-1945). Berlin: Metropolis 2011.

- 巖谷小波『日本昔噺』平凡社、2001年
- 大阪朝日新聞 1918年7月29日
- 大阪朝日新聞 1918年8月19日
- 大阪朝日新聞 1919年1月20日
- 大阪毎日新聞 1918年7月8日～9日
- 大町桂月、中内蝶二『少女と山水』日高有隣堂、1905年
- 大町桂月『筆のしづく』公文書房、1915年
- 『オール読物』1938年10月
- 『オール読物』1940年6月特別号

『オール読物』1941年11月

『キング』1938年8月15日

『厨川白村集第三巻 文藝評論』厨川白村集刊行会、1925年

文部省編『高等小学読本 三』文部省編集局、1888年

『講談倶楽部』1939年6月特別号

佐藤林平「日本の紹介者クルト・マイスナー」『慶応大学経済学部日吉論文集』(34)、1984年

田村一郎『板東俘虜収容所の全貌』朔北社、2010年

中里信一「板東人、クルト・マイスナー覚書」『愛知学院大教養部紀要』54(4)、2007年。

鳴門市ドイツ館史料研究会編・訳『ディ・バラック』第1巻～4巻、鳴門市、1998年～2007年

鳴門市ドイツ館史料研究会編・訳『ラーガーフォイアー』第1巻、鳴門市、2022年

『細田民樹、貴司山治集』(『日本プロレタリア文学』第30巻)新日本出版社、1987年

『民族と歴史』1919年2月号

『民俗と歴史』1919年5月号

『富士』1940年13(10)

『文藝春秋』1938年5月